

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19830092

研究課題名（和文）周辺地域における森林環境形成とネットワークの社会的派生に関する研究

研究課題名（英文） The Formation of Forest Management and Network of Workers for Forest in Less Favored Area

研究代表者

福田 恵（FUKUDA SATOSHI）

東京農工大学・大学院共生科学技術研究院・講師

研究者番号：50454468

研究成果の概要：

本研究は、森林形成に関与した周辺山間地域の関係構造をネットワークの派生という観点から考察したものである。フィールドワークの結果、森林形成に従事した人びとの繋がりがネットワーク状に幾重にも派生してきたこと、また、インフォーマントのそれぞれの出身地域ごとに行動パターンや意識に差があることが明らかとなった。こうした結果は、異なる性格を持つ山間地域が相互に関係し合いながら、森林環境の形成に寄与したことを示唆するものである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,040,000	312,000	1,352,000
平成 20 年度	1,190,000	357,000	1,547,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,230,000	669,000	2,899,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：周辺地域、森林環境、ネットワーク、村落、林業移動

1. 研究開始当初の背景

（1）理論的背景

本研究は、以下三つの研究群を背景としている。第一に、近代化、世界のグローバル化が突き進み、さまざまな社会的矛盾が露呈する中で、「地方社会」や「周辺地域」の意義を問い直そうとする諸研究、第二に山野、森林から地域社会を問う諸研究、第三に従来の地域研究、村落研究の方法論的限界を超えよ

うとする知的潮流である。

（2）問題設定の背景

調査実施段階で直接の前提となったのは、第一の諸研究である。近年、周辺山間地域の再考の気運が高まっているが、その問い直しは、現実的な山間地域の存在の「限界」化を背景として、社会的・経済的・思想上の論点など多岐の分野におよんでいる。本研究の問題関心は、こうした時代的学問的要請に立脚

しながら、「社会関係」という社会学的なテーマに焦点を当てて、フィールドワークから得た山間地域と森林環境との繋がりに関するこれまでの調査データ・情報を勘案して設定したものである。

(3) 調査の背景

本研究の調査地は、兵庫県香美町村岡区の一集落を本拠地としている。本調査地は、『兵庫県内農村社会の変動過程に関する研究』（平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2））研究成果報告書）で取り上げて以降、約10年継続して、社会経済の現状および近代以降の集落生活史に関する調査を実施してきた。

平成16年度には周辺集落の調査、18年度には鳥取県森林管理署、宍粟市山崎町、一宮町等の調査を加えてきた。

2. 研究の目的

(1) 位置づけ

研究の全体的内容は、次の三つから構成される。(a) 実証的には、日本の森林資源の形成と展開を、一集落の定点的調査と山間地域各地のネットワーク調査とをつなぎ合わせることで描出すること、(b) 理論的には、調査事例から山間地域のダイナミックな社会特性と持続的発展の社会プロセスを論点化すること、(c) 発展的には、その論点を軸としながら、森林を介して立ち現れる周辺地域のもつ社会的豊饒性や持続的展開を国際的汎用性の高い議論に引き上げること、以上である。

本研究「周辺地域における森林環境形成とネットワークの社会的派生に関する研究」は、定点調査が終了しているため、(a) 後半部から(b)を射程とし、とりわけ、森林形成に果たした周辺山間地域の関係性をネットワークの派生という観点から解明しようとするものである。

(2) 調査目的

調査研究上の具体的目的は、日本の森林資源の形成プロセスに関与した地域組織および社会的ネットワークを明らかにするために、集落内外を結ぶキーパーソンを特定し、その人物の社会関係を明らかにすること、またその関係性を林業上の繋がり、地域上の繋がりから分析し、林業の関係網を明らかにすること、さらには森林形成に対して、地域組織の果たした役割と広範囲におよぶネットワークが果たした役割を明らかにすることなどが挙げられる。

3. 研究の方法

研究手法は、集落の事例研究による。ただし、一事例の記述のみに終わる調査報告や多

数の地域をばらばらに類型化する事例研究とは、つぎの点で異なる。まず、集落内に残された外部者の痕跡、人的交渉の蓄積を辿りながら外部者をつきとめ、そうした人々の地域生活、移動歴からもとの集落をみつめなおす。つまり、一集落から全国各地の山間地域に迫り、全国各地の山間地域から一集落を明らかにする手法を用いる。具体的には、集落の集中的調査をベースとして、機縁法を導入してその接合を図る。

調査については、事前調査（1-2日程度）、本調査、追加調査（2-3日程度）の段階で実施した。訪問先が複数にわたるため、調査地を4ブロックにわけ、一回の調査出張で2-3カ所の調査地を巡回できるようにした。

4. 研究成果

(1) 調査結果

初年度は、森林形成に関与した人びとと社会関係を具体的に把握するため、香美町村岡区、香住区で取得した調査データをもとにして、岐阜県高山市、富山県南砺市、兵庫県香美町美方区、香住区で調査を実施した。調査情報が不十分な地域については、森林組合、教育委員会、自治会長などにブリーフィングをおこなうとともに、数集落の踏査から林業関係者を特定した。調査情報が確定している地域については、林業家、製材業者、林業出稼ぎ経験者、森林組合作業員などのライフヒストリー、ネットワークの生成プロセスに関する聞き取りを実施した。聞き取り情報を補充するために、関連部署、関係者から文書資料、画像資料等を収集した。

最終年度は、昨年までに確認した林業者の関係網をさらに詳細に把握するために、兵庫県香美町村岡区および香住区、美方区、鳥取県鳥取市、智頭町、若桜町、岡山県西粟倉村にて調査を実施した。

(2) 考察結果

初年度の調査結果からは、森林形成に関与した人びとの繋がりネットワーク状に幾重にも派生してきたことが確認された。最終年度の調査結果については、インフォーマントのそれぞれの出身地域ごとに行動パターンや意識を解釈した結果、山田集落近辺の移動労働者と鳥取の移動労働者、および富山・岐阜の移動労働者では、異なる社会的性格を保持することが明らかとなった。

こうした結果は、異なる性格を持つ山間地域が相互に関係し合いながら、森林環境の形成に関与したことを示唆するものであり、持続的な環境形成プロセスをネットワークの派生という観点から照射しうる可能性を秘めている。

(3) 論文内容

論文(「山間地域にみる社会関係のダイナミズム」)では、山間集落における社会関係の動態を対象に据えた。主として、調査拠点となった集落の人物たちの社会的上昇と下降および内外に派生するネットワークの状況を明らかにした。内容は以下の通りである。

集落内の躍進者は、むらを包み込む大局的文脈からみれば、国家的要請や市場経済の浸透など政治的経済的資源の動員と無関係ではなかった。国、市場、メディアは、山村に対して、ある時は騰落を繰り返す商品を提供し、またある時は進取・開拓の機運や大規模な事業を持ちこんだ。異なる角度から複数の視線が送られたことにより、集落内では、人々の予想を上回る速度で状況が推移し、また思いもしなかった場面で急伸の資源が生み出された。このなかで、一部の人物たちは、率先してリスクの高い経営や事業に乗り出し、また外部機関や村外者との間に独自のネットワークを派生させた。

大局的な脈絡のもとでなされた人物たちの行為は、同時に村落住民にとっても、重要な意味を帯びた。というのも、彼らの対外的活動は、生活困難の打開、進取的人物の到来、文化の流入など人々の渴望とその期待に応えようとする気概の現れに他ならなかったからである。この渴望と気概の応答は、経済基盤が固定化せず、たえず複数の生業をこなさなければならなかったこと、その中で仕事の当たり外れが常態化したこと、さらには生活困難や停滞感が渦巻くほど特定人物への期待が高まったことなど、山間地域に生じやすい社会状況によって加速された。

この事例は、先行研究に照らして、次のようにまとめられる。先行研究では、外部機構が特定人物を選び取るプロセスと、村落住民の意識や繋がりが人物に力を与えるプロセスとが別々に描きだされてきた。だがこの二つは、一個人の活動のなかでは表裏一体をなしていた。林野経営や事業にからむ諸実践は、国家行政や市場展開の末端的活動でありながら、同時に村落住民から評価される行為でもあった。また村落住民が評価した才覚や実力のうちには、対外的なネットワークや情報網を獲得し駆使する能力が含まれていた。

ある人物が内外の要請を表裏一体的に体现することによって、家柄や土地の多寡などに裏打ちされた伝統的権威の維持や堅固な階層の再生産は生じにくくなる。むしろその行動が多面的な意味を帯びることで、個人的資質への期待が高まり、その人物たちを軸としたフレキシブルな関係を生成させていくのである。この変化は、意外にも社会経済的に有利な地域よりは、不利な状況におかれ、危機感が強まった近代期の山村に見出すことが可能だったのである。

論文(周辺地域における林業ネットワーク

の展開過程)では、特に、離村者に焦点を当てて、ネットワークの派生状況を確認した。内容は以下の通りである。

但馬地域では木材の伐採や運搬に携わった者は数少なかった。木材業に身を投じるためには、地域内の林業観を覆す職業観(ないしは人生観)を自前で獲得する必要があったが、両者は、離村に付随する一連の経験を通して、林業に関わる既成の規範を乗り越え、新たな林業観、職業観を自らのうちに形成させていた。

国有林経営と労働組合運動のはざままで自らの生活の糧を維持し、木材業の盛んでない地域で独自の林業観を培っていくもう一つの契機となったのは、全国各地から来ていた出稼ぎ者との関係であった。調査対象とした離村者は、出稼ぎ者の専門的技術の高さを認め、彼らから技術を享受することで、地域内では希少な林業者として成長していった。他方で、出稼ぎ者もまた二人から日常生活や地域林業の重要な情報を得ていたのである。

この事例内容は、次のような意味を持っている。一つは、国有林で働く離村者は、空間的にも社会的にも集落から離れた周辺に身を置いたが、かれらが、奥山(国有林)において重要な役割を果たした点である。これは、山林形成が地域社会のみならず、近隣地域への離村者を含む複数の労務者の相互関係(微細な情報交換や技術伝習)を媒介として成し遂げられたことを指し示している。今ひとつは、農山村間の移動ないしは農山村同士のネットワークという論点を導出した点である。近年、都市住民と農山村住民との連携による「流域共同管理」が提起されているが、そうした都市農村関係にくわえ、幅広い農山村ネットワークも加味しながら、山のダイナミックな利用を再考すること、また移動者と林野というテーマを議論の俎上にのせることがこの事例では示唆されている。

(3) 対外的報告、地域還元

本研究は、従来の林野研究(社会学、法社会学、経済史、民俗学、林業経済学など)の成果を、森林形成、ネットワークの派生といった観点から他分野横断的に整理することを目指していた。

そこで、調査の概略については、第59回日本民俗学会年会で報告し、研究の前提となった調査成果の一部は、『ソシオロジ』に投稿した。

また本研究は、国際比較に向けた前提的作業でもあるため、日本の森林形成の事例をもとにして、森林問題が深刻化するラオス人民民主共和国国立社会科学アカデミーおよびウドムサイ県ナーモー郡アーイ村村長と互いの国の森林問題について意見交換を行い、本研究のパーспекティブの国際的汎用性

に関する知見を得た。

研究成果については、それぞれの調査地の要請に即して、日本国内およびラオス関連機関にアルバム・年表の提供等を行った。また成果は、『ソシオロジ』および『大谷大学哲学論集』に投稿のうえ掲載された。また日本と東南アジア（ラオス）との比較に関する論考も執筆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

1. 福田 恵、「周辺地域における林業ネットワークの展開過程 「離村者」からみた関係網の派生」大谷哲学会『哲学論集』、査読有、第55号、2009年
2. 福田 恵、「山間地域にみる社会関係のダイナミズム 階層流動下で躍進する人物を手がかりとして」『ソシオロジ』、査読有、第162号、2008年、3-20頁

[学会発表](計 1件)

1. 福田 恵、「山野をめぐる社会的世界 村落と林業移動者の交錯点から」、日本民俗学会、2007年10月6日、大谷大学

[図書](計 1件)

1. 福田 恵、めこん、『ラオス農山村地域研究』、2008年、301-308頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田 恵 (FUKUDA SATOSHI)

東京農工大学・大学院共生科学技術研究院・講師

研究者番号：50454468